

★ えにしだ



えにしだ
※「金雀児」とも書く。



えにしだ（白） ※赤色もある。



花を訪れたセイヨウミツバチ。

ハチが花をこじ開けると、雄しべがばねのように飛び出してハチの体に花粉を付ける仕組み。



†えにしだ（「金雀児」とも書く。）

マメ科レタマ属の落葉または常緑の樹高2～4mの低木。パレスチナの荒野の丘陵及び岩石地帯、特に死海付近に多く繁茂している。良く分枝し、葉は単葉または3裂し、非常に細いが、砂漠では気持ちのよい木陰をつくる。花（黄花、白花等）は枝の葉腋（ようえき：葉の付け根の内側部分）に、あるいは総状花序（そうじょうかじょ：長く伸びた一本の花軸に、多数の花を付ける花序）で咲く。一つの花は小さいが、非常に多数の花が咲き、長楕円形の鞘（さや）をつける。実はさやえんどうによく似ているが、熟すと真っ黒になる。えにしだの根は下剤、枝は解熱剤や傷の手当て、枝を粉にしたものを蜂蜜と混ぜて催吐剤（嘔吐を誘発させることによって胃の内容物を吐かせることを目的とした薬）や下剤、駆虫剤（寄生虫を殺すか体外に排出するために用いられる薬）にするが、実は有毒である。

「えにしだの炭火」（詩編120：4）と記しているのは、えにしだが木炭を作るのに広く用いられていたことによる。えにしだの炭は固く上質で、火持ちがよく、砂漠の民にとって大切な貿易品だった。

※日本においても、成長が早く、土壌を削った切り通しのような栄養の少ない場所にも育ち、大木になることもない。さらに花が咲けば美しい。開発のための道路整備が進むとともに、エニシダも日本全国へ広げられていった。初夏の頃、道路沿いの切り通しを見上げると、鮮やかな黄色の花束が風に揺れているのを見かける。そこにある最大の理由は、山を削ってきた法面の崩壊を防ぐための緑化である（毒性が強いため現在では植えなくなっている）。